

茶路川筋のアイヌ語地名

第5回

○御仁田(おにた)

国道392号を北上し、中茶路にある簡易郵便局を過ぎたところで、茶路川にかかっている協和橋を渡ると「御仁田」に入ります。

「御仁田」は、「パナアンオニタトウンペツ」という川の名前に由来し、その意味は、「パナ(川下)・アン(ある)・オ(川尻)・ニタイ(森林)・ト(沼)・ウン(ある)・ペツ(川)」で、「川下にある川尻に森林と沼がある川」と訳されます。

■「パナ」と「ペナ」

「パナ」があれば「ペナ」があると言われるとおり、アイヌ語地名には、対になっているものがあります。御仁田のもとになった「パナアンオニタトウンペツ」も少し北側に「ペナアンオニタトウンペツ」という川があり対になっています。



望郷橋とペナアンオニタトウンペツ川

川下を意味する「パナ」に対し、「ペナ」は川上のことを言い、どちらの川も茶路川に注いでいることから、茶路川の川下側に川尻があるのが「パナ」、川上の方に川尻があるのが「ペナ」と名前がつけられました。

このほかにも、『白糠のアイヌ語地名』では、「パナ」「ペナ」がついた次のような地名が紹介されています。

「パナアンルペシペ」と「ペナア

ンルペシペ」(川下・川上にある道が山を越えて向こう側の土地へ降りていつている)

「パナアンルーチシポク」(川下にある峠の下(上り口))と「ペナアンルーチシポク」(川上にある峠の下(下り))

「パナアンソーポコマナイ」と「ペナアンソーポコマナイ」(川下・川上にある滝下川のあるところ)

○イオロウシ

「イオロウシ」は、国道392号が協和橋の辺りで崖を迂回するようにカーブしているところを指し、川の名前にもなっています。「エ(頭)・ウオロ(水についている)・ウシ(ところ)」に由来していて、山がせり出し、その先端が川にせまっているようすを表します。「イオロウシ川」は、そのせり出した山を回り込むように高台の手前を流れ、茶路川に注いでいます。

■ガンケと氷坂

尾関一男氏は『茶路開拓史』の中で、松川から高台への道(旧道)について次のように記しています。

高台へいく崖(ガンケといつて

いた)の手前で、御仁田に分かれる道がある…(略)。

高台への道は、崖を開いて人や馬がおれるだけの道をつくり、山の裾をまわっていて、イオロウシ川を渡って進み、急坂を斜め右に登る…旧三郷神社前をとりセタラナイ川にでる。

ただ、大正十三年の地図には、国道392号線と同じく、氷坂(通称)をとめる道がしめされているが、このような道があったのかもしれない。

ここに出てくる通称の「ガンケ」は、イオロウシの先端の崖を示し、「氷坂」は、現国道の高台から北側へ下りる日陰の坂を指しています。このような通称もその場所のようすや情報を端的に伝える地域ならではの地名として大切にしたいものです。



ガンケ(協和橋付近から撮影)